

申年に想う

(2004.1.7)

JANUARY 

子ども達がエンチョウ「ゴリラ」というからではなく、本当に私は“申”年なのです。そして、還暦です。私は、年令を感じることは殆どない、というより年を取ることと、自分の若さ、元気に喜び、誇りを感じていましたが、今、この文章を書き始めて、還暦—60才！という文字を目の前に、少々動揺しています。「エッ！オレ、もう60才？」という感じです。しかし、青春とは、年令ではなく、精神的、肉体的なものです。若くても老けている人がいます。これからの私のスローガンは「感動！青春！」にします。まるで高校野球のスローガンみたいですね。今日は“猿”について書こうと思って書き出したのですが、急カーブして「年齢」の方向に行ってしまいました、元に戻します。

「猿の行動発達」という本を読みました。猿と人間は同列に論じ得ないでしょうが、非常に似ているし、示唆に富むところがあります。「常同行動」という言葉が出て来ます。床に座り、うずくまり、自分の体の一部を抱いたり、あるいは、なめる、指を吸う、体を常に揺るといった、判で押したように行動です。生後の一時期まで隔離し、単独で飼育した猿に、この特異な行動が現れるといいます。「社会的隔離の中でも、特に母子隔離、母ザルとの身体的接触の欠如によるところが大きい」と述べています。その行動は、常に不安定な心を表しているようです。そして、そうした猿を集団の中に戻しても、ルールを知らず集団生活になじめないそうです。メス猿ですと、妊娠出産しても、子猿を育てないそうです。生きていくこと、心が育つことは、本能ではなく、集団の中で学習していくものなのです。

子ども達が、幼稚園という小さい社会の中で心豊かに育っていくより良い環境を作っていかなければならないと、強く思いました。今年も子ども達が心豊かに健やかに育っていける、家庭と社会と幼稚園にしましょう。



豊かで平和な日本に生まれて

(2004.2.2)



寒い日が続いたかと思うと、急に暖かくなったりします。寒さと暖かさが押し合いへし合いしながら、段々春に近づいていきます。

ポカポカ陽気に誘われて、近くの公園へ行くと、私を見つけた子ども達が「アッ、エンチョーゴリラだ！」と言って飛んで来ました。子ども達と凧揚げ（と言うより、風がないので凧引き回し走り、と言った方が良く）、サッカー、鬼ごっこをしました。暑くなり着ているものをどんどん脱いで、とうとうTシャツ一枚になってしまいました。他人が見たら、随分大きな「ガキ大将」と思ったでしょう。

少し疲れたので、枯草の上に寝ころがりました。背中がチクチクしました。子ども達も一緒に寝ころがり、抜けるような青空を見上げると、大きな旅客機が初春の陽を浴びて、機体をキラキラさせながら飛び去って行きました。子ども達が、「何処へいくのかな?・・・」「僕達もよその国へ行ってみたいなー」「園長先生は、よその国へ行ったことある?」と言いました。私は年末に行ったカンボジアのことを思い出しました。手足を失った人や、失明した人を何人も見掛けました。1年に3回もお米が採れ、アンコールワットの壮大な遺跡から推し測れるように、昔は非常に豊かで高い文化を誇っていた国でした。大國の植民地化から、独立に至るまで、戦火にまみれ、田畑が荒れ、戦争と貧困に苦しめられました。そして、物売りの子ども達のこと、彼等の一番の夢は、学校に行き勉強したいということ、ヨーロッパ各国から、NGOなどで子ども達のために献身的に働いている人々がいることなどを話しました。子ども達は黙って聞いていました。

雲一つない青空に、凧がゆったり泳いでいました。豊かで平和な日本の冬の日でした。
不景気だ、社会の活力が低下していると言うが、日本はまだまだ平和で豊かです。子ども達のために、この平和で豊かな社会を守り、引き継いでいく責任が私達にあります。子ども達が、軍隊の派遣ではなく、この平和を世界に広めていくような、人間になって欲しいと願っています。



子どもを見守るということ

(2004.3.1)



A君が疲れて、幼稚園をお休みしました。お母さんの話では、友だちに引っ張りまわされ疲れてしまった、と言っているとのことでした。心の優しいA君は、お友達に誘われると、嫌と言えないのです。自分のやりたいことをしようと思っても、友達に強く誘われると、断れないのです。そんなA君なので、みんなから好かれています。だから、A君は、一層疲れてしまいます。

お母さんの対応が素晴らしかったのです。「嫌なことは、嫌と言いなさい」、とは言わなかったのです。「人の気持ちですので、ゆっくり長い時間がかかるのは仕方がないことと考えています。嫌と言えないA君を、認めながら見守りたいと思います」、と言いました。A君は、ちょっとお休みして、一息ついたのだと思います。理解し、支えてくれる人がいるから、安心してお休みして、勇気の充電をすると、また、幼稚園に戻ることができるのだと思います。「毎度、これを繰り返してきました。これから、疲れてはお休みし、母の胸に帰り、そして、再び幼稚園へ、友達と、先生のところへ戻るのだと思います。こうした経験を繰り返し、大きくなるにつれて、だんだん心が強くなり、挫けない人になるといいですね」。とお母さんが言いました。

私は、お母さんに感動しました。子どもの心に共感するとは、寄り添うとは、理解するとは、こういうことなのですね。心を育てるとはこういうことなのですね。自立させるということは、突き放すだけではなく、暖かく包み込み、余計な口出しはせず、自分で乗り越えて行くのをしっかりと見守ることなのですね。

自立とは、自ら立つのですから、他から口出しして指示したりしたのでは、意味がありません。自ら体験し、自ら乗り越え、ぽきりと簡単には折れない心を自らの体の中に育てていかなければなりません。私たちにできることは、子どもたちを支え援助し、自ら壁を乗り越える力をつけるのを待つことです。



考える力

(2004.4.8)

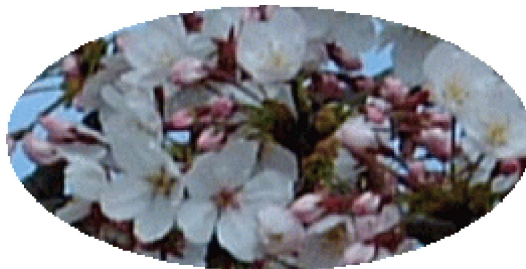


オウムの麻原の判決が出ました。それにしても、頭が良く、優秀な成績で良い大学を出た人がどうして麻原彰晃などの、見るからいかがわしい奴に丸め込まれ、子ども騙しのトリックに引っ掛かってしまったのでしょうか。しかも、人として決してしてはならないことを、麻原の意の儘にやってしまいました。常人には、まるで理解できないのです。

しかし、彼らは本当に頭が良く、優秀であったのでしょうか。インテリジェンスがあったのでしょうか。違うと思うのです。確かに学校の成績は良かったし、世間で良いと言われている大学を出ているでしょうが、日本の学校の成績にそれほど意味があるとは思えないのです。日本の大学を出ることが世界で評価されているとは思えないのです。それはそれとして、彼らは、決して頭が良くもなく、優秀でもなかったと思うのです。人間の能力で最も重要な事の一つは、考える力であると思うのです。そして、おかしいと思う事に会った時に、自分の頭で考え、疑問を持つことができることです。インテリジェンスがあると言う事は、おかしい事をおかしいと思えることです。自分の頭で、あれやこれや思いを巡らし思考することができるのが、他の動物とは決定的に違うところです。

3月、4月は、教育関係機関での、セレモニーへ出席する機会が多かったのですが、そこでの光景に違和感を抱きました。まるで自分が北朝鮮にでもいるかのような錯覚を覚えました。ほとんどの行動が軍隊の様に訓練され、統一されて、指示命令されたとおりに動いていました。1人の号令（掛け声）いっか、言われたとおりに一糸乱れず、唱和したり、行動したりするのです。ある幼児施設では、大脳教育と称して、フラッシュカード等を用いて徹底した暗記教育とマーチングを行っていました。そうした教育を行えば行うほど、絵本を読んでもらったり、子供同士で遊ぶ時間が削られ、豊かな言葉の世界から離れ、遊びの世界で試し、工夫し、思考することを失ってしまいます。

子ども達から遊びが奪われた時から、自主的・主体的に思考することが減少していったと思います。遊びの中で、子ども達は全知全能を傾けてあれやこれや思考し、工夫します。大人がしゃしゃり出て、指示命令したのでは、子ども達は物事を考えなくなってしまうのです。物事を覚えることも大切ですが、暗記ばかりに偏り過ぎると、思考力がおろそかになります。やはり幼児期は、思いっきり、自由にのびのびと遊ばせたいと思います。



親の願い

「健康で、心のやさしい子」に育て欲しい

(2004.5.7)

MAY 

男女共同参画社会推進条例に関して、桃太郎の話に出てくる、「お爺さんは山に芝刈りに、お婆さんは川に洗濯に」は、性別による役割分担ではないのか、教育の世界でなんでも同じにしていもいいのか？という訳の分からない質問を受けた。教育の世界で男女を同じにするのが面白くないらしい。お爺さんが川に洗濯に行っても、お婆さんが山に芝刈りに行っても、一向に構わない。ただ単に「お爺さんは山に、お婆さんは川に」の方が話が分り易いだけのことである。教育の世界に止まらず、**男女の違いを認めつつ、男と女が互いに尊重し合い、助け合ってより良い社会を目指していかなければならない**ことは当然のことである。何でも同じではなく、違いは違いとして、今まで抑えられていた女性に、もっと活躍の場を認めていかなければ、これからの社会は発展しないだろう。

五月五日は端午の節句。子どもの日。桃太郎や、金太郎の人形が飾られている。桃太郎の「気は優しく力持ち」こそ、男の子の理想像だからであろう。いつの時代も、親はみんな「心優しい健康な子」に育て欲しいと願っている。心優しい日本の男なら、女性に対しても、これからはお互いに助け合い、尊重しあって生きましようと言うぐらいの度量が欲しいものである。

「気は優しく力持ち」が男の子の理想像であるなら、「気立てが良くて働き者」と言ったところが女の子の理想像であろうか。しかし、根本的には、どちらも同じことを言っていると思う。親は、心が優しく力仕事を苦もなくこなしてしまうぐらい健康で生き生きしている人間に育て欲しいと願っている。保護者の皆様に、「どの様な子に育て欲しいですか、」と尋ねると、数十年の間、親の答えは同じであった。おそらくこの世に親子の関係が出来た時からずっと親の思いは変わらないのではないか。「心優しく、健康な子」というのが親の願いのほとんど全てである。これが親の本心であろう。

しかし、現代社会の現実が、親の願いを捻じ曲げてしまっている。早く教えないと置いて行かれてしまうとの脅迫めいた塾やドリルのチラシ、ダイレクトメールが送られてくると、親は浮き足立ってしまう。「心優しく健康に」などということはすっかり忘れ去られてしまう。人が人間に育っていくというのはどういうことなのか、子どもを育てるとはどういうことなのか、問い直さなければならぬ時にきている。

学力が低下しているから、もっと子ども達を競争させて厳しく勉強させなければならない、という意見があるが、これ以上、子ども達を追い込んで、どうしようというのだろうか。学ぶということは、**自ら学ぶ意欲**がないことには、まったく効果がない。人間として大切なことをしっかり育てることが、前提である。心身共に健康な子どもは、学習にも意欲的な子どもになる。駆り立て、追いたてられたところに、**自主的な意欲は育たない**。先ずは、心と体を逞しく育て、意欲や自主性を身につけることが先決である。



・・・その2・・・

『 5月の子ども達の姿 』

5月の連休が終わる頃になると、子ども達一人一人の地が出てきます。あちらこちらでトラブルが続発します。他人との関係があるからこそ、幼稚園は子ども達が初めて出会う「**小さな社会**」なのです。人間は、他人との関係の中でしか、人格を育てられません。**この小さな社会の中で、衝突し、葛藤し、社会性、自己抑制など、人間としての人格の基礎を身につけます。**

最近、少子化社会の中で、子ども同士で遊ぶ機会が少なくなりました。いつも、お母さんに見守られていて、衝突する時はほとんど止められてしまいます。又、お母さんと2人きりの時は、殆どの事が許されてしまいます。初めて自分一人で他の子と遊ぶ時に、どの様に他の子に接してよいか分からず、急に友人を突き飛ばしたり、噛み付いたりする子もいます。他の子が使っているスコップを、いきなりひったくったりすることもあります。勿論、集団生活の中では、そんなことは許されません。家ではいつも自分が一番であったのに、幼稚園では並んで順番を待たなければなりません。家では、やりたい放題であっても、幼稚園ではそれを許してくれない他人がいます。そこで衝突が起こります。**家庭ではできない人との関わりがあるからこそ、幼稚園の存在意義があると言えます。**

自分の思い通りにいけなくなり、幼稚園が窮屈になってきます。一人一人の子どもが、みんなそれぞれ壁にぶつかり、もがき、それを乗り越えようとしています。幼稚園に行きたくないと言い出したり、**友達と衝突したりする事は、実は、みんな一歩前進なのです。成長の`証し、なのです。**子ども達同士の自己主張のぶつかり合いの`ケンカ`は、他人にも主張があること、他人との関係、やって良い事と悪い事があること、人との折り合いの付け方を学ぶ貴重な機会です。そこから、他人の立場を思いやる事が出来る様になるのです。お母さんはうろたえず、どっしりと構え、じっくり見守り、みんな受け入れ、共感し、抱きしめ、愛情を充電し、心を安定させてあげて下さい。

しかし、一方的な暴力であったり、弱い子を攻撃することは、自己主張のぶつかり合いとしての“ケンカ”ではありませんので、決して許しません。その場で厳しく指導します。人に対し、やってはいけないこと（悪い事）を教えます。**幼稚園は一人一人を優しく見守ると同時に、人間としてのルールを身につける場でもあるのです。**

従って、小さなトラブルはいちいち双方のご家庭に報告しません。幼稚園で起こった子ども同士のことは、幼稚園の全面的責任ですが、一方的な暴力であったり、一方を傷つけてしまったりした時は、双方のご家庭に報告するように致します。

半年もすると、すっかり落ち着きます。今はアウトローの世界も、**子ども達の法（ルール）が支配する「しっかりした小さな社会」になります。**ご心配をお掛けして申し訳ありませんが、子ども達の成長を楽しみに待って下さい。



米百俵－未来への投資

(2004.6.1)



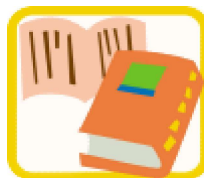
小泉総理の就任演説で米百俵の話が話題になった。苦境に対峙して我慢することの大切さばかりがクローズアップされてしまったが、米百俵の話は本来、どんなに苦しい時でも、自分たちは食わなくとも、社会の未来であり希望である、子ども達の教育に投資しようと言う趣旨であった筈である。

日本の先人は、自分たちの未来を子ども達に賭けてきた。子ども達の教育こそ、この社会の発展に繋がる、社会を豊かにすると考えた。だから、どんなに苦しくとも、自分たちは食べなくとも、子ども達を大切にし、子ども達の教育に賭けたのである。

市内の学校を歩いてみて、昔の人々が子ども達をどんなに大切にしていたか、そして、その教育に対する熱い思いに気付かされた。昔からある古い学校は、どこもその土地の中心の、高台に造られている。それに比べ、大規模開発の計画内で建てられた物は別にして、新しく建てられた学校のほとんどが、地域の端の、埋め立て地にある。学校の建て方からして、昔の人々と現代の人々の、教育に対する姿勢が垣間見られる。町の高台の一等地に、恐らく、当時としては、町の予算の多くを費やして建てられた学校と、できるだけ予算を削って、町の端の低い埋め立て地に建てられた学校では子ども達の育ちが違ってくる。子ども達は、高い所が好きである。いつも屋根の上に乗って遠くを見ていた「次郎物語」の次郎ばかりでなく、子ども達は高台から周囲を睥睨して、遠い未知の世界を望む。子ども達は遠くを見ていながら、実は遠い未来を見ているのだ。未来を見て、夢と希望に胸ふくらませているのだ。埋め立てのジメジメした低地からは、夢や希望は湧いて来ないのではないか。

この国が、資源もない東洋の外れのちっぽけな島国でありながら、ここまで発展したのは教育の力以外にない。人材こそ資源であると、子ども達に投資したのである。

私は、イソップのアリとキリギリスの物語を思う。私たちの未来である子ども達への投資を忘れた時、その社会の未来がどうなるかは、明らかである。



道理の分かる人に育てる

(2004.7.1)



テレビの討論番組を見ていると、こんな番組を見ている人達は、道理の分からぬ人間になってしまわないかと心配になる。相手の言い分を聞かずに、自分の主張を声高に喋り続け、相手の主張を封殺してしまう。中には、司会者自身が、大声で怒鳴り出し、出席者が発言できなくなってしまう。議会でも、やたらと大声を張り上げ、怒鳴り散らす輩がいる。そういう輩の言うことはだいたい中身がない。

民主主義社会の討論は、まず相手の話をじっくり聞くことである。その上で、自らの主張をしっかりと、相手に理解してもらうように静に話すべきである。大声を出し、怒鳴りつけるのでは、相手を黙らせることは出来ても、決して相手の理解を得ることはできない。道理の分かる人間に育てるには、子どもの言い分をじっくり聞くことと、子どもにしっかりと、静かに言い聞かせることである。

おやつ時間に、3歳児の部屋に行ってみると、クッキーを食べていた。A君のテーブルを見ると、クッキーがいっぱいこぼれていた。A君に、「たくさんこぼしたね。」と言うと、A君は、口を尖らせて、「だってこのクッキーはこぼれやすく出来ているんだもの。」と言った。「そうか、こぼれやすく出来ているのか、でも、B子ちゃんも、C子ちゃんもこぼしていないね。」という、「そりゃそうだよ、B子ちゃんも、C子ちゃんもこぼさないように食べているからだよ。」と言った。私は、一瞬『何を生意気な』と思ったが、彼の言い分に間違いはない事に気づいた。「なるほど、こぼさないように食べているからこぼさないのか、それでは、君はこぼさないように食べられるかい。」という、「当たり前だよ」と、彼は真剣になって、こぼさないように食べた。あそこで「生意気言わず、さっさとこぼさないで食べなさい。」と言わなくてよかったと思った。

子どもは、子どもなりに理屈を考え、主張している。その理屈をしっかり受け止めてもらっていると、相手の言い分に対しても耳を貸すことのできる、道理の分かる人間になる。子どもが人を傷つけることを言ったり、迷惑をかけたりした時でも、頭ごなしに叱り付けるよりも、きちんと言い聞かせることの方が、効果がある。私も、市議会で、大声で怒鳴られて教育委員長を辞めたが、子ども達は、静かに人の話を聴き、静かに話の出来る、そして道理の分かるジェントルマンとレディに育てたいものだ。



教育委員長辞職について、沢山の励ましを頂き、心から感謝申し上げます。

さて、教育委員長を辞職したことについて、「突然、どうして?」という声が沢山ありました。私は、あの形骸化した世界と魑魅魍魎の世界から開放され、「これでやっと元通り、子ども達とも遊べるし、言いたいことを言えるようになった」と清々した気分でした。だから、あの世界については、触れなくなかったのです。しかし、教育委員長としての私に、期待してくれていた方々に対しては、期待に応えられず、お詫びしなければならないと思っておりました。辞職の経緯も説明しなければならないとも思っていました。

教育委員会の形骸化が言われるようになって久しいですが、戦後、教育の民主化、教育における地方自治、地方の独自性を守るための制度として、その理想は非常に高いものでした。しかし、現実是非常勤の委員にとって、スポーツ、芸術、公民館、図書館、等々から学校まで、広い守備範囲を守ることは不可能に近く、予算、人事については教育長を筆頭とした執行部

に委ね、重要事項について事前の報告を受け、審議、議決することになります。（従って、どこの市町村でも、議会で答弁するのは教育長ですが、どういう訳か取手だけが、権限のない教育委員長が答弁するのです。）しかし、今年度の予算作成についても、重要な変更であるはずなのに、事前に報告すらありませんでした。保育料補助金の減額についてさえ、私は教育委員長であり、そして、幼稚園の理事長であり、この地区の幼稚園連合会の会長を長年やってきたにも関わらず、事前に何も知らされませんでした。他市町村の園長先生から「取手は、保育料補助金が減額になったそうですね」と言われ、知らなかった私は、顔から火が出る思いでした。私は、執行部に厳重に抗議しましたが、非常に悔しく、無力感で一杯になりました。結局、教育について、意欲と情熱を燃やせば燃やすほど、壁に突き当たり、限界と無力感を感じるようになっていきました。そして、予算の大幅な削減についてさえ、私宛の校長会からの予算増額要望が出てから、あわてて取り繕う始末でした。

こんな状態の中で、T議員から、今回の予算について感想を求められたので、正直に教育費予算の削減について批判しました。米百俵の話を取り上げ、市民は他の予算を削っても教育予算を守ってくれと願っている筈、と申し上げました。しかし、この私の発言に対し、その後、言論の府であるはずの議会でN議員が、激高し机をたたき、「取手の住民でない教育委員が、何が米百俵だ！教育委員長なら、体を張って市長を守れ！」と大声で私を怒鳴り、恫喝しました。私は翌日、議長に「2分で良いので発言させて下さい」と、反論の機会を求めました。しかし、発言は許されませんでした。

教育委員会は独立の行政委員会の一つであって、民間人であるレイマンにより、あらゆることに偏ることなく、教育行政をコントロールするのが役割であるとされています（レイマン・コントロール）。従って、一度教育委員になった以上、独立して、市長にも、議会にも左右されず、教育を守り、子どもを守るのが役割であって、市長を守るのが役割ではありません。教育を低下させ、子ども達のためにならない教育予算の削減に対して批判するのは、教育委員として当然の役目です。

また、前日、議長の許可を得て、私が退出した際にH議員が「議会軽視だ！連れ戻せ！」と騒ぎ、議会が紛叫したとのことでした。私は翌日、その発言者の言動を一日中観察し、記録しておきました。途中、何度か退出する以外、殆ど眠っており、時には大っぴらにあお向けになって熟睡しておりました。そして、次の日は欠席していました。どちらが議会軽視でしょうか。テレビカメラを議員席に向けて、放映することをお勧めします。また、市民が午後の議会を見に来られることをお勧めします。

元々、教育委員会制度自体が、そして、市政自体が機能していないこと、その改革が先に進まないことに対して、いら立ち、一部議員の横暴とパフォーマンス（自分の質問の時だけ支持者を呼んで大ハッスルし、後は寝ている。保育料補助削減の予算に議会で賛成しながら、市民から請願が出ると、先頭に立って、削減反対を唱える矛盾、票目当てだけの節操のなさ！）。ニガニガしく思っていたところに、タイミング良く(?) T・H両議員が辞職のチャンスを与えてくれたのです。お二人には心から感謝申し上げる次第です。

しかし、他の教育委員さんは、本当に一所懸命に頑張っています。また、議員の中には市を良くしようと頑張っている立派な人もたくさんいます。市民の皆さん、教育委員会の皆さん、頑張っている議員の皆さんに、ご心配、ご迷惑をお掛けして、誠に申し訳なく思っています。私は、私なりに改革案を持っています。市と市民と子ども達のために汗をかいているこの人たちと一緒に、今度は外から発言していきたいと思えます。

浅田



水芭蕉に似たヒメカイウ

子ども達に豊かな未来を！

(2004.9.1)

SEPTEMBER 

今年は記録的な暑さが続きました。又、大雨の被害も各地でありました。日本だけ見ても異常気象ですが、世界中で同じような異常気象が起っているようです。東京の平均気温が、数十年前に比べ、2～3度高くなっているというデータもあるようです。地球の自然を破壊し温暖化、砂漠化が進み、後世に取り返しのつかない負の遺産を残そうとしています。

今夏、北海道へ行きました。道央、道東へ行くと、ほとんど交通量もありませんでした。それなのに、まだ道路を造り続けていました。もう道路は不要なのではないか、それより、自然を守った方が良く、と思いながら大雪山と知床に向かいました。大雪山系は、深い森に包まれていました。知床は、熊が出没しているので通行禁止になっていました。船から眺める知床半島は、どこまでも透明な海と、美しい緑の自然が守られていました。知床や大雪山系に道路はいらない、その中に入れなくとも良い、豊かな自然をこのまま守り残して欲しい、と思いました。

今、私達、日本は、不況だとは言え、とても豊かです。この豊かさを自分達の時代だけで享受して良いのだろうか、あどけない赤ちゃんや幼児を見ていると、この子達の未来に対して、この豊かさを引き渡さなくてはならないと思います。自然を破壊し、資源を食いつぶし、ゴミの山を残してはならないでしょう。

ゴミの分別は面倒だからやらない、車内を暖めたり冷やしたりしたほうが快適だから、エンジンをかけっぱなしにしておく、などということをやっているのでは、益々環境が悪くなってしまいます。少し不便なくらいの方が、少し面倒なくらいの方が良いのではないかと思います。

私達は、あまりに効率性、利便性、快適性を求めすぎではないでしょうか。自分の家の中や、車の中をガンガン冷やして、熱風を外に放出し、暑い、暑いと言っているのは、おかしいことです。



マイルドセブンの丘

子ども達の叫び

・・・どこまで頑張ればいいのか・・・

(2004.10.1)

OCTOBER 

今夏はたくさんの本を読むことができました。そして、たくさんのことを考えさせられました。綿密な取材に基づいて、子ども達の叫びを書いた本の中で、親の過剰な期待に頑張り続け、頑張りきれなくなった時に、プッと切れてしまう子どもの姿がありました。

数年前、全国の国公私立幼稚園の園長先生、設置者を対象にした研修会で、「幼稚園の教育はどうあるべきか、」という話をする機会があり、私は、「幼稚園は子どもが主役であり、子ども達の為に、私達は、何ができるか、そして、子ども達の為になるのは何か、深く考えなければならない」と訴えました。そして、「遊びを充実させ、子ども達の生活を生き生きとしたものにしなければなりません。」とお話しました。その日の夜の懇親会の席でのことです。私は著名な幼児教育者から、「浅田先生の言っていることはその通りだが、言っているようにやっていないと思う。先生の言うようにやっていたら、私立の幼稚園は成り立たない。」と言われました。胸にグサリとききました。

その後しばらくして、園児募集をすると定員の二倍も三倍も集まると豪語している幼稚園の園長と話す機会がありました。その園がどういう保育内容か、興味を持ちました。内容は、育児不安につけ込み、こうすれば競争に勝つといった、内容のない軽薄な英才教育と、徹底した父母へのサービス（子どもへのサービスではありません）です。幼児教育界では、数十年前から批判されているマーチングやフラッシュカードに、親は「泣いて」喜ぶというのです。

そこでの子どもは、大人の言う通りに一所懸命動き、素直で、健気です。そこに至った『結果の健気な姿』に親は泣くのだと思います。しかし、決して子どもは自発的、自主的に行動しているのではないと思います。『そこに至る課程での姿』と、「親の期待に答えようとする心」を知った時、親はもっと泣くのではないかと思います。

私達は、大人の勝手な思いと都合で、子ども達の生活を侵していないでしょうか。幼児期には幼児期にふさわしい生活をさせなければ取り返しができません。子ども達の人格形成には、自主的で主体的な遊びが欠かせません。幼児期にはゆったりとした時間の流れの中で、じっくりと遊び込ませてあげたい、と心から願っています。



知識と体験

(2004.11.1)

NOVEMBER 

知識があるために、物事の本質を理解出来ないことがある。子ども達が大切に育ててきた大きな幼虫が、今まさに羽化して、アゲハ蝶になろうとしていた。飼育ケースを囲んで誰もが興奮していた。あの醜い虫が、瞬く間に美しい蝶になる。何度か、経験している私でさえ、胸がドキドキするほどの感動の出来事である。みんなが固唾を飲んで見守っている時、クラスの物知り博士のA君が、部屋へ入ってきた。私はA君にも見せたくて、「おい、A君、見ろ、あの幼虫が、蝶になるところだ。」と興奮ぎみに声を掛けた。すると、A君は、こちらを見向きもせず、何を騒いでいるのだと言う風に、「あ、それ知ってるよ、羽化って言うんだ。」と冷やかに言った。私は、何故か彼の態度に腹が立った。「羽化と言うぐらい、みんな知っているよ、君は羽化しているところを見たことがあるのか。」と言うと、「本で見たことあるよ。」と言った。「描いてあるものではなく、これは本物だ。」と私。「本のは、本当ではないの?」と彼。「本当だけど、あれは絵。これが本物。」と私。なんだか禅問答みたいになって、さっきの感動は何処かに失せて、しら気てしまった。絵本では、象とうさぎは大した差がなく描かれている。象の大きさ、うさぎのかわいらしさ、**本当の姿は、直接見てみなければ分からない。**

今朝のニュースで、小学校6年生までに、日の出、日の入りを直接見たことがないと言う子が、50パーセントを超え、**自然体験、直接体験が少なくなっている**と伝えていた。取手の幼稚園の園庭に続く土手に登ると、晴れた日の朝晩には、美しい富士をくっきりと望むことができる。丁度今頃の、十月半ば過ぎから、夕方には、真っ赤な太陽が西の地平線に沈んでいく様が見られる。その太陽に照らされて、富士が影絵のようにシルエットになって浮び上がる。それを見た子が、私に「先生、**本物の富士山**を見たことある?」といったことがある。絵や写真ではない**本物に感動した**のである。

人は感動しなくなった時に、老いる。子どもの時代は、あらゆることに興味を持ち、驚き、感動する。なにかあるとすぐに飛んできて、「なになに、どうして、なぜ、すげー」を連発するのが、子どもの本来の姿であった。子ども達は、感動と体験を心と体にいっぱい溜め込んで、大きく逞しく育っていく。小さく小利口に育って欲しくない。



赤ちゃんの効用

(2004.12.1)



『赤ちゃんを抱っこしよう』という社説が目についた。私は赤ちゃんを見ると、つい頬が緩んで、手を差し出したくなるので、興味を持って読んでみた。子どもの時から、赤ちゃんに触れ合う機会を作ろう。**自分で抱っこすれば、赤ちゃんの可愛さや、命の不思議さを体で知ることができる。**そんな試みが各地の学校で広がっている、という内容であった。共通するのは、触れ合いを通しての生徒の驚きと、赤ちゃんの成長を実感することだ。

猿と人間は同じには論じられないが、猿やチンパンジーの社会では、兄弟や若い猿が、赤ちゃん猿の面倒をみて、出産や育児を学んでいく。猿の集団の中で育ったことがなく、育児を体験していない猿は、子育てができず、子猿を殺してしまうと言う。

私は赤ちゃんを見ると、抱っこしたくなる。あのプリプリした感触と赤ちゃんのミルクの臭いがたまらないのである。どんないやなことがあっても、赤ちゃんを抱くと、心がゆったりと和んでしまう。赤ちゃんがいるだけで、周囲が明るくゆったりとしてしまう。幼稚園で赤ちゃんを抱いたお母さんがいると、つい「抱かせて下さい」と、お願いしてしまう。そして、子ども達の中に連れて行くと、子ども達がみんなニコニコして集まって来て、「可愛い!」「触っていい?」「抱かせて」と言う。

赤ちゃんを抱いたことがない女性が「赤ちゃんを抱くのが怖い」と言った。「抱いたことがないから、どうしていいかわからない」と言う。少子化と核家族化社会の中で、家庭の中に赤ちゃんがいることが少なくなっている。昔は地域社会に協同体があり、又、大家族でもあり、どこの家にも、隣近所にも赤ちゃんがいた。子ども達も赤ちゃんに触れて育っていくのが普通であった。幼児虐待や、赤ちゃんを欲しいと思わない若い夫婦が増えているのは、こんなところに原因の一つがあるのかも知れない。

前記の生徒の驚きの声。「**赤ちゃんが一人いるだけで、部屋の中のみんなが笑顔になる。赤ちゃんはすごい力を持っているんだ**」。赤ちゃんに触れ合う試みが、広がることを心から願っている。

